

「福祉考房」の取り組み（第2報）

～社会福祉士養成課程における実践学習の試み～

かわ な まさ あき
川 名 正 昭

〈要 旨〉

少子高齢化が進む現在の日本で、国民は自立生活を求められている。何らかの理由で生活上の不都合が生じたとき、社会保障や福祉関連制度による支援やサービスが提供される一方、身体的な不都合の改善には福祉用具の利活用も大きな要素となってくる。しかし、社会福祉士養成課程において福祉用具の取扱いは極めて少ないのが現状であり、カリキュラム上の工夫や課外での取り組みが必要と考える。

前報では学生の実践学習の取り組みとして、地域との交流・連携や福祉用具に関する実践の場「福祉考房」を紹介し、参加学生へのアンケートから社会福祉士養成課程における実践教育の効果があったことを述べてきた。

本稿では、昨年度の活動をベースに学生の達成目標として「車いす整備技術認定資格」を導入する経緯や活動に関する思考・情報整理にマインドマップを活用した事例などを報告する。また、参加学生へのアンケートおよびマインドマップから現状の課題と改善点などを示す。

〈キーワード〉

福祉考房¹⁾ 社会福祉士養成課程 実践学習 マインドマップ

I. はじめに

2007年5月に施行された消費生活用製品安全法の改正により、福祉用具に関する重大事故の報告が義務づけられ、経済産業省のホームページ²⁾で公開されてきた。その後、2009年9月に消費者庁が発足し、同庁ホームページ³⁾で公開されている。この情報公開を機に福祉用具に対する安全管理や意識の向上が注目され始め、さまざまな動きにつながっている。消費生活用製品安全法の施行後から2009年8月までの事故公表件数を日本福祉用具・生活支援用具協会⁴⁾（JASPA）清水が集計したものを図1に示す。

この報告から介護ベッド、電動および手動車いすに関する事故件数が多いことがわかる。これらの福祉用具は利用者も多いため、事故の起こる件数も他と比較して多いことが考えられる。事故情報の公表とともに事故原因が製品起因か利用者起因か分析されて

いるが、使用場所や状況が施設や自宅内、単独事故などの場合は原因特定が難しいことも多い。事故率を下げるためには、福祉用具の使い方をよく理解したうえで、福祉専門職が利用者に正しい使用方法を説明できることも必要とされてくる。⁵⁾

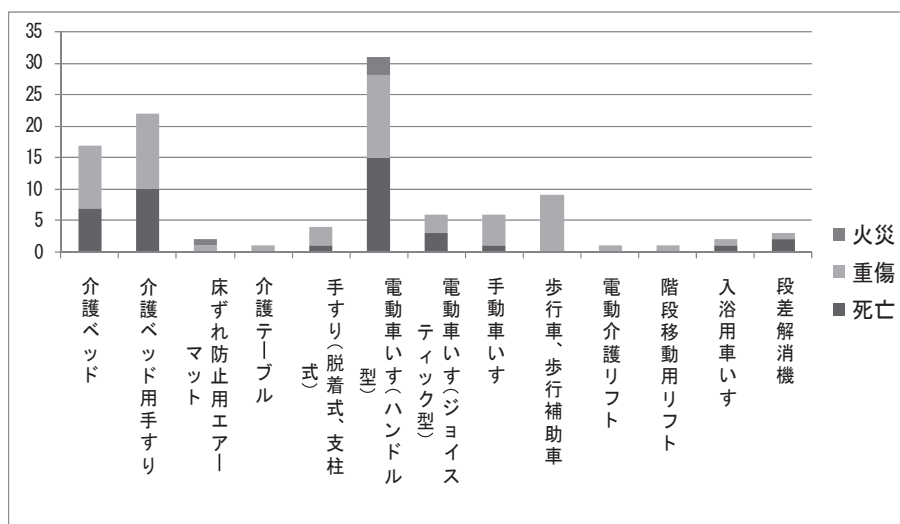


図1 経済産業省重大事故公表件数 (2007年5月～2009年8月11日)

※出典：日本福祉用具・生活支援用具協会『日本の福祉用具の事故と安全』(2009)

事故リスクを低減するためには、その原因と責任の所在を明らかにし、それぞれで対応策を確立していくことが有用である。JASPAが2008年に行った「福祉用具のライフサイクルにおけるリスクマネジメントに関する調査」によれば、リスク低減の責任を製造者、販売・貸与事業者、介護者に分けて整理している。⁶⁾ 福祉専門職は福祉用具の中間ユーザーとしてのリスク低減の責任があるとされる。

製造者のリスク低減策として、2008年から福祉用具に対して新JIS制度が本格運用され始めた。先に述べたように、手動車いす、電動車いす、在宅用電動介護ベッドにおいて重大事故が多く起こっていることもあり、優先して適用されている。認定された製品には図2のようなJISマークが表示されるが、福祉用具分野におけるJISマークであることが一目で分かるようにJISマークの隣に特定分野を表すマークを付記する「目的付記型」となっている。



図2 福祉用具分野における目的付記ありJISマーク

これまでも品質管理や環境に関する ISO9001 や ISO14001 などの規格認定もあったが、JIS マークの導入で製造者の品質管理体制を構築し、製品の安全性を確保することができる。そのため、福祉用具の利用者は JIS マークが表示されていれば、製品の安全性が見た目でわかり、購入・レンタルの際の選択基準にもなる。⁷⁾

JIS マークの表示はあくまでも工業標準化法によるもので、一般的なモノに対する最低限の基準としては有効である。しかし、福祉用具の場合は個別にカスタマイズされたものも数多く、また個人で購入した車いすなどは工場出荷状態から整備されないまま使用され続けたために、安全性が低くなってしまう可能性もある。この観点からも福祉専門職の福祉用具の知識や理解が増し、簡単な整備などができれば、利用者をより安全・安心して支援していくこともできるだろう。

施設等では車いすの台数が多いうえ、日常業務も多いために福祉用具の保守整備にかける時間が得られない現状も耳にする。そのため、保守整備技術を身につけた学生などがボランティアとして福祉用具の軽整備を行うことは、事故を未然に防ぎ、安心した暮らしを支えることにもつながっていくだろう。社会福祉士の資格取得のための必修科目である「障害者福祉論」で使用される一般的なテキストでは、福祉用具に関する記述は 1 % に満たず、知識が十分に得られない。⁸⁾ 福祉用具に関する知識を得る講義科目や福祉用具の操作、簡単な整備などを経験できる演習を組み合わせた教育も必要となる。

前報⁹⁾では、社会福祉士養成課程における実践学習の試みとして『福祉考房』の活動を紹介し、福祉全般、特に福祉用具に関する理解に十分意義のある結果が得られたことを報告した。本稿では、昨年度の活動をベースに学生の達成目標として「車いす保守整備認定資格」を導入する経緯や活動に関する思考・情報整理にマインドマップを活用した事例などを報告する。これらは、福祉専門職として利用者の安全を支える具体的な実践につながると考える。

なお、「福祉考房」の取り組みは 2008 年度～ 2010 年度の 3 ヶ年で私立大学等経常費補助金特別補助「教育・学習方法等改善支援」に「社会福祉援助者としての教育効果を上げる学びの場『福祉考房』における実践学習プログラムの実施」として採択され、継続実施している。

Ⅱ. 活動の可視化

2008 年度の活動は、教員側があらかじめ計画したプログラムを学生が実践するものが多かったが、2009 年度はより実践効果を上げるために 2008 年度から活動している学生も各プログラムの計画に加わった。意見を整理するために、可視化技術の一つであるマインドマップ¹⁰⁾を利用した。

マインドマップは、1970年代はじめに Tony Buzan により広められた記憶や発想などを連想式に記述し、可視化する技法である。中央にイメージを置き、そこから伸びるツリーを分岐していき、中央から離れるほどより具体的な情報や課題、目標などを表現しているため、より理解しやすい特徴がある。個人の暗黙知を形式知にしたり、会議記録などの情報整理したりするために広く用いられている。マインドマップ作成には、公認ソフト iMindMap Ver.3 for Windows¹¹⁾ やマインドマップ的なツリー状の関連図が作成できる EasyStep¹²⁾ を使用した。

2009 年度の活動について学生たちとブレインストーミングをおこない、マインドマップに表したものを図 3 に示す。

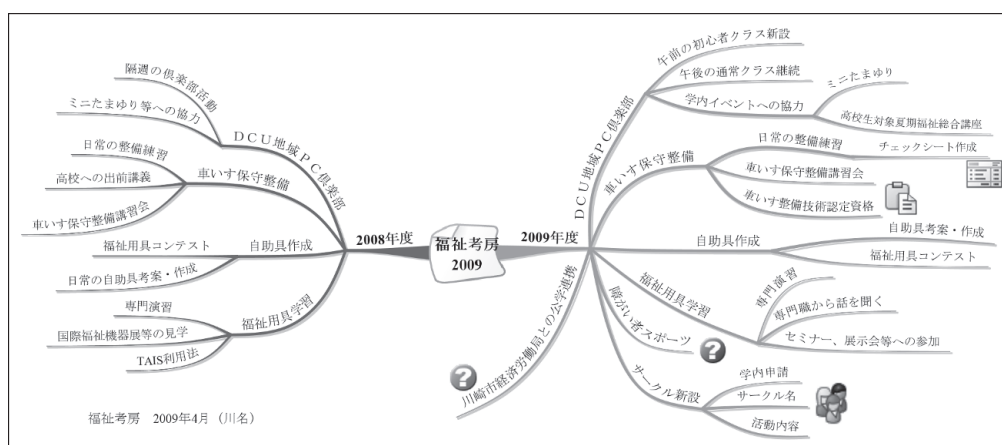


図3 福祉考房の活動計画（iMindMap 使用）

図3の左側で2008年度の活動を振り返り、右側で2009年度の活動について展開している。あらたな活動として、『DCU地域PC倶楽部』ではメンバー増加による初心者クラスの新設、『車いす保守整備』では考房内の認定資格「車いす整備技術認定資格」の導入とそれに伴う「チェックシートの作成(更新)」、福祉用具学習では「(福祉用具)専門職から話を聞く」などが主だったところである。また、積極的に活動している学生を中心に「大学公認サークル」の新設も計画された。

Ⅲ. 活動内容

1. 車いす保守整備

車いす保守整備については、日常使用する車いすを安全に利用するための整備が中心で、福祉考房で引き取った車いすを教材に個々人で整備の確認や練習を行っている。整備マニュアルは、車いす保守整備講習会で使用したものをもとに、経験者が書き込みをしたものなどを利用している。以下に車いす保守整備に関する個々の取り組みについて説明する。

（１）車いす保守整備講習会

2008 年度に引き続き、2009 年度も株式会社カワムラサイクル横浜サービスセンター様のご協力により、8 月 10 日に 3 時間の保守整備講習会を開催した。参加者は 11 名で、うち 9 名が初参加である。昨年も参加した学生は、さらに技術を磨くため自分の苦手としている部分を質問したり、初めて参加する学生をサポートしたりと積極的な姿が見られた。

今回は特に介助ブレーキの調整を見入る参加者が多く、いつも手間取ることの多かったブレーキワイヤーの取り扱いや調整方法をしっかりと覚えたようだった。



図 4 タイヤ交換の様子



図 5 説明を真剣に聞く参加者

（２）福祉考房「車いす整備技術認定資格」

学外での車いす保守整備活動を実践するにあたり、整備技術を確認するとともに、学生の活動目標のひとつとして、福祉考房独自の車いす整備認定資格を設定した。整備項目は、車いすでトラブルを抱えやすい箇所を中心に、車いす整備の活動をしている学生たちと意見を交わし、図 6 のようなマインドマップを用い検討した。

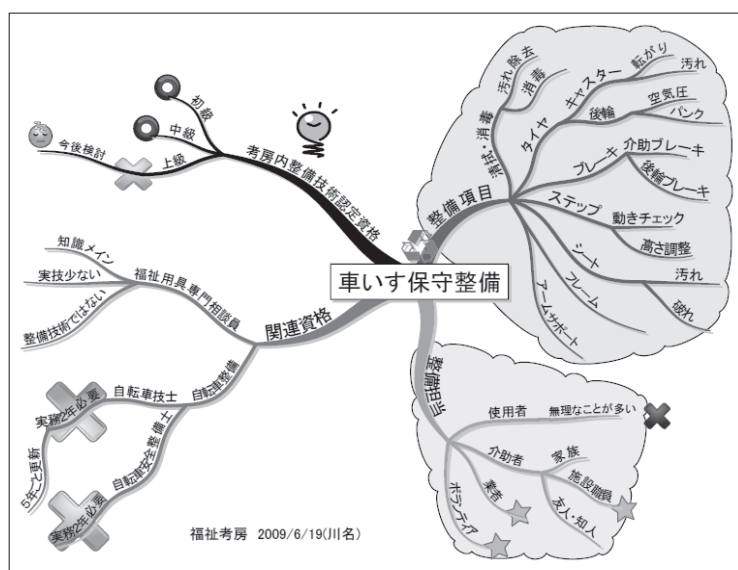


図 6 車いす整備技術認定四角の検討 (EasyStep 使用)

そこから、ボランティアでも整備可能な範囲の技術認定を目的として、表 1 に示す概要と整備項目とした。“初級”は主に月 1 度程度の日常整備に必要な項目、“中級”は 3 カ月に 1 度程度または各部チェック時に調整・交換が必要となった場合に整備する項目である。

上級の概要および整備項目についてはボランティアとして整備活動をする場合にどこまで整備を行うか、福祉用具の販売・貸与事業者とボランティアの連携などを視野に入れ、今後の検討課題とする。

表 1 車いす整備技術認定資格

	概 要	整備項目
初級	清拭と消毒 後輪の空気圧チェックと交換 その他、各部チェック	タイヤ空気調整 取り付け各部増し締め 虫ゴム、チューブ、タイヤ交換
中級	初級のチェック 日常使用における保守整備	初級の整備項目 キャスト分解・清掃・交換 ステップ調整・交換 駐車ブレーキ調整・交換 介助ブレーキワイヤー調整・交換
上級	※今後検討	

(3) 車いす保守整備チェックシートの作成

これまで車いすの保守整備時には、車いす管理番号や大まかな状態チェックを記載する簡易シートを使用してきたが、前述の整備技術認定資格の実施に伴い図 7 のような車いす保守整備チェックシートを作成した。

車いす保守整備チェックシート		ver. 1	
車いす番号		保守整備年月日	20 年 月 日
保守整備担当者		保守整備結果	良好 ・ 要 再整備 ・ 要 部品発注

部品	整備内容	チェック	各部メモ（整備結果など）
後 車 輪	空気圧は不足していないか？（タイヤの腹を指で押す）		
	タイヤがすり減っていたり、ひびが入っていないか？		
	車輪の回転はスムーズか？		
	車輪の取り付け部にガタ、ネジの緩みはないか？		
	ハンドリムの取り付け部にガタつきはないか？		
キ ャ ス タ (前 輪)	回転はスムーズか？（髪の毛等が巻き付いていないか？）		
	ボルトの締め付けに緩みはないか？		
	タイヤがすり減っていたり、ひびが入っていないか？		
	キャスタ取り付け部のガタ、緩みはないか？		
駐 車 ブレーキ	駐車ブレーキは正常に機能するか？		
	駐車ブレーキの取り付け部にガタはないか？		
介 助 ブレーキ	介助ブレーキは正常に機能するか？		
	ワイヤーの破損、折れ曲がり、サビはないか？		
ア ー ム サポート	破損やガタつきはないか？		
	側板に変形や破損はないか？		
フ ッ ト サポート	ステップポストはしっかりと固定されているか？		
	ステップ板、フットサポート(布)に破損はないか？		
	ステップ板のバネは正常に機能するか？		
シ ー ト	シートに破れ、ほつれはないか？		
	シートの固定ネジに緩みはないか？		
	汚れはひどくないか？		
フレーム	フレーム全体にガタ、ゆるみはないか？		
※背折れ	（背折れがある場合）正常に動作するか？		

※チェックについて ○：良好 △：要整備 ×：要部品交換

全体メモ：

図7 車いす保守整備チェックシート

2. 自助具考案・作成

自助具作成については、テクノエイド協会の「自助具ハンドブック」に掲載されているものを作成し、障がいの理解と工作技術の習得を目的に活動している。しかし、作成した自助具が利用者にとって使いやすいものなのかを評価するシステムが整っていないことが課題である。以下に自助具考案・作成に関する個々の取り組みについて説明する。

(1) 自助具作成体験セミナー

2009年7月29日および8月5日に川崎市産業振興会館7階研修室にて小中学生のKIS夏休み自助具作成体験セミナーを開催し、2日間で26名の小中学生および保護者等が参加した。このセミナーは、かわさき基準推進協議会が主催者であり、川崎市経済労働局との公学連携事業のひとつである。かわさき基準推進協議会からセミナーの依頼を受けた後、学生と図8のようにプログラムを検討した。

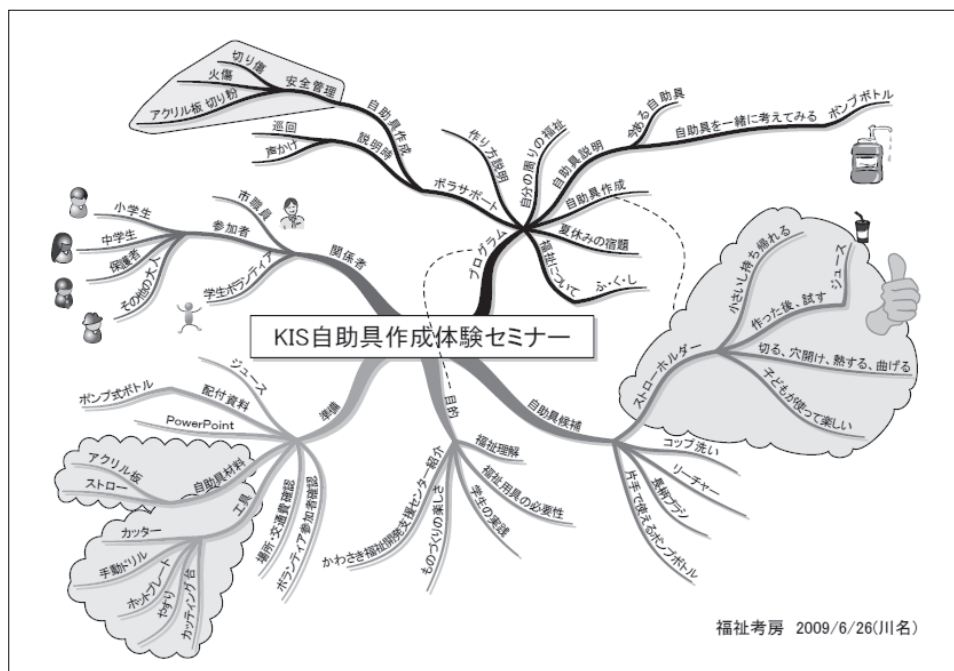


図8 自助具作成体験セミナーのプログラム考案(EasyStep 使用)

その結果、セミナーは3部構成で、一緒に考え体験できるように設計した。

① 考えてみよう！(40 分間)

高齢者や障がい者が生活のどのような場面で不便を感じるのかを考え、それを補うためにどのような自助具があるのかを説明した。また、片手でも使いやすいポンプ式ボトルを参加者と一緒に考えた。

② 作ってみよう！(40 分間)

ストローを手で持たずに使えるストローホルダーを作成した。作成手順は、まずアクリル板をPカッターで切断し、手動ドリルでストローの通る穴を空ける。その後、ホットプレートで温めて曲げ、コップの縁にかかるよう成形した。

③ 調べてみよう！(20 分間)

福祉用具について更に調べていくときのキーワードについて話した。小中学生を主な参加者としたため、夏休みの宿題につながるように配慮した。

参加した子どもや保護者にアンケートを行った結果、プログラム全体を通して満足度は高かった。図9や図10の当日の様子からわかるように、特に学生のサポートが親切・丁寧であったことの評価も高く、火傷やケガに注意しながら安全な作業を続けられた。作成方法についても十分に確認・準備したため、困惑している参加者もしっかりとサポートできていた。

ボランティアで参加した学生たちは、子どもたちと交流できたこと、作り方を教えた子どもが上手に作品を作れたことなどに達成感を感じたようだ。彼らもストローホルダーをどうやって作れば簡単で怪我がないかなど、事前の準備を一緒に考えていたので、セミナーがよい成功体験になったと考える。



図9 自助具作成体験セミナー(1)



図10 自助具作成体験セミナー(2)

3. DCU 地域PC 倶楽部

2008年度は受講者定員70名を大きく上回る受講者登録があり、受講者のパソコン能力格差から学習の進め具合がひとつの課題になっていた。

そこで2009年度は、あらたに初心者クラスを設け、活動日の午前中に約90分間で開講することとなった。毎回40名程度が参加し、指定テキストをもとにパソコンの起動から文字入力、ワープロソフトやインターネット閲覧など基礎から学習している。講師およびサポート役は昨年度から参加されている地域の方で、ともに支えあう形で行われている。

午後のクラスは80名を超える登録者があり、そのうち毎回50～60名程度が参加している。(図11)ボランティアの学生も毎回2～3名がつくようになった。ボランティア学生は自主的に活動する者もいるが、今年度より開始した1年生必修科目の「福祉マインド実践講座」において、選択式ボランティアの1つに指定され参加している者もいる。どの学生の態度も参加者に対して真剣で、強制的に参加させられているという感じは見受けられない。

参加した学生からは、「地域の方と接する機会はないし、とても楽しく参加できた」や「地域の方から逆に教えてもらった」、「自分にとってコミュニケーションやパソコンの勉強ができたので、とてもためになった」など前向きな意見も聞かれた。

また、図 12 のように高校生向けの夏期福祉総合講座という授業の中で、高校生とともにバリアフリーマップの作成に協力していただくなど地域における世代間交流もおこなっている。バリアフリーマップ作成では段差や坂道などのバリアに限らず、高齢者ならではの視点や地域の特徴などを知ることができた。参加した高校生もあらたな気づきやニーズを知ることとなり、地域の実情を福祉の視点で実感する良い機会となった。



図 11 コンピュータ教室での活動



図 12 バリアフリーマップ作成

4. F K C（福祉考房サークル）

2008 年度から活動している学生を中心に、活動の一部を大学公認サークルとして組織した。メンバー 13 名で週 3 日、自主的に活動している。活動内容は、車いす保守整備、自助具作成が主で、障がい者スポーツに関する活動も予定している。本学の学園祭にて、車いす体験や自助具作成、ユニバーサルゲームなどの体験ブースを設けることとなった。車いす体験では、点字ブロックの設置やスロープ作成で勾配を検討するなど、住環境に関する知識の具体化にもなった。自助具作成体験では、夏期の自助具作成体験セミナーで得た経験を活かして、安全対策や準備などを行っている。ユニバーサルゲームでは、誰もが楽しめる簡単なボールゲームを考案・作成し、来場者に体験してもらう予定である。

5. 学生の活動状況について

福祉考房の利用者数を年度ごとに集計したものを表 2 に示す。また、利用者の内訳を表 3、活動種別ごとののべ利用者数を表 4 に示す。

算出期間が年度によって一定でないため単純な比較はできないものの、表 2 から利用者は年々増加していることがわかる。特にのべ利用者数の増加が顕著だが、これは週 3 回の F K C 活動が反映されているためである。

表3の利用者内訳を見ると、地域福祉学科の学生が多いことがわかる。これは、筆者の担当する専門演習で福祉考房の活動をした学生19名が含まれたためである。また学年別に見ると1年生の利用者が多く、満足度が高ければ今後の活動も活発に行われることが期待できる。

表4を見ると、車いす保守整備と授業での利用が多いが、授業は週1回約10名が出席するためである。したがって、車いす保守整備が活動の主体であることがわかる。その他の利用者が49名となっているが、これには福祉用具関連事業への就職相談や家族の福祉用具利用相談、バイク修理や靴修理のために工房を訪れた例もあった。

表2 年度ごとの利用者数比較

年 度	参加者数 A (人)	のべ参加者数 B (人)	平均参加回数 $B \div A$	期 間
2007	27	73	2.7	2007/10/1～2008/1/31
2008	62	382	6.2	2008/4/1～2009/3/31
2009	68	560	8.2	2009/4/1～2009/10/27 現在

表3 利用者の内訳

学科・専攻	1年	2年	3年	4年	計
地域 男	10	5	10	8	33
地域 女	7	2	4	3	16
社会 男	3	3	0	4	10
社会 女	2	1	3	2	8
介護 男	0	1	0	0	1
介護 女	0	0	0	0	0
計	22	12	17	17	68

表4 活動種別ごとののべ利用数

活 動 内 容	参 加 者 数
地 域 PC 倶 楽 部	30
車 い す 保 守 整 備	209
自 助 具 制 作	90
授 業	182
そ の 他	49
合 計	560

IV. 福祉考房アンケート

1. 調査方法

福祉考房を利用した学生に、福祉考房の評価および改善点に関するアンケートを実施した。図13のような質問項目で、無記名の質問紙法で行った。

調査期間は、2009年10月12日～10月17日で、アンケート用紙は、2009年4月1日～10月10日までの利用者68名のうち54名に配付し、任意回答で49名分を回収した。アンケート回収率は83.1%で、利用経験のある者のうち72.1%の回答を得た。

平成 21 年 度 福 祉 考 房 ア ン ケ ー ト

学科・専攻： _____、 学年： _____ 年、 性別： 男 ・ 女、 活動期間： _____ 年 _____ 月

1. 福祉考房ではどの活動に参加しましたか？（複数回答可）

①DCU 地域 PC 倶楽部 ②車いす保守整備 ③自助具製作 ④授業 ⑤自助具作成体験セミナー

2. 福祉考房の活動に参加しようと思ったキッカケは何ですか？（複数回答可）

①活動内容に興味を持ったから ②ポスター・チラシを見て興味を持ったから ③友達に誘われたから

④福祉用具の知識を増やしたいから ⑤福祉援助者になるためには必要な知識だと思うから

⑥空いた時間を有効に使いたいから ⑦その他（ _____ ）

3. 福祉考房の活動を通して、福祉機器・用具等に関する理解は深まりましたか？（該当する 1 つに○）

①深まった ②まあまあ深まった ③あまり深まらなかった ④深まらなかった

4. 質問 3 の選択肢を選んだ理由を教えてください。

5. 福祉考房の活動を通して、福祉用具以外の福祉分野について興味は増えましたか？（該当する 1 つに○）

①増えた ②まあまあ増えた ③あまり増えなかった ④増えなかった

6. 質問 5 の選択肢を選んだ理由を教えてください。

7. 福祉考房の活動で良かった点は何ですか？（自由記述。足りない場合は用紙の裏を使用してください）

8. 福祉考房の活動で改善して欲しい点は何ですか？（自由記述。足りない場合は用紙の裏を使用してください）

9. 今後、福祉考房でこないたい活動はありますか？

①ある（内容： _____ ） ②ない

10. 福祉考房の活動を友人や後輩に勧めたいですか？

①勧めたい ②まあまあ勧めたい ③あまり勧めたくない ④勧めたくない

11. 質問 9 で③または④と回答した人はその理由を教えてください。

図 13 アンケート用紙

2. 集計結果と考察

アンケート集計は、Microsoft Excel で質問項目ごとの単純集計をおこなった。また、それらの結果を表とグラフにしたものを以下に示す。

表5に学科・専攻、性別および学年別のアンケート回答者内訳を示す。また、回答者の活動期間を表6に示す。表6の活動期間で「単発」は、継続した活動をしている者以外のことで、後述する質問(2)で就職相談や靴の修理などで何度か訪れた例があった。

以上から、回答者の中心は3, 4年生で、6ヶ月以上継続して参加している学生が多いことがわかる。

表5 アンケート回答者内訳

学科・専攻	1年	2年	3年	4年	計
地域 男	3	4	10	8	25
地域 女	4	0	4	3	11
社会 男	0	2	0	4	6
社会 女	0	1	3	2	6
介護 男	0	1	0	0	1
介護 女	0	0	0	0	0
計	7	8	17	17	49

表6 活動期間

活動期間	人数
単 発	9
1ヶ月以内	2
2～3ヶ月	4
4～5ヶ月	7
6～11ヶ月	13
1年以上	14

アンケート用紙の設問ごとの回答結果を以下に示す。

(1) 福祉考房ではどの活動に参加しましたか？（複数回答可）

表7に活動内容ごとの参加人数と回答者全体に占める割合を示す。

活動の中心は車いす保守整備と自助具製作となっており、回答者の7割弱が少なくともどちらかの活動に参加している。また、両活動ともに参加している学生は26名で回答者全体の53.1%である。

表7 参加した活動

活動内容	参加人数（人）	全回答者に占める割合（%）
1. DCU地域PC倶楽部	9	18.4
2. 車いす保守整備	32	65.3
3. 自助具製作	34	69.4
4. 授業	21	42.9
5. 自助具作成体験セミナー	9	18.4

(2) 福祉考房の活動に参加しようと思ったキッカケは何ですか？（複数回答可）

活動に参加しようと思ったキッカケを表8に示す。

65.3%が「1. 活動内容に興味をもった」と回答していることから、積極的に参加していることがわかる。「4. 福祉用具の知識を増やす」も42.9%と多く、福祉用具そのものに興味を持ち参加している者も多いことがわかる。一方、その他と回答した学生の中には、「進路相談」にきた例もあった。福祉用具の販売・貸与業に興味を持ち、どんな企業があるのか、仕事内容はどのようなものかを聞きにくるものであった。また、福祉考房の機能や工具を頼ってきた例も見られた。

表8 活動に参加しようと思ったキッカケ

キッカケ	回答者数	全回答者に対する割合 (%)
1. 活動内容に興味をもった	32	65.3
2. ポスター・チラシ	0	0.0
3. 友達に誘われた	10	20.4
4. 福祉用具の知識を増やす	21	42.9
5. 援助者として必要	10	20.4
6. 時間の有効活用	4	8.2
7. その他	11	22.4

「7. その他」の回答

- ・進路相談 (3)
- ・活動の説明を聞こうと思って (2)
- ・先生に誘われた (2)
- ・バイクの修理道具を借りに
- ・楽しそうだから覗いてみた
- ・靴の修理
- ・学園祭の相談

※() 内の数字は回答者数

(3) 福祉考房の活動を通して、福祉機器・用具等に関する理解は深まりましたか？（該当する1つに○）

表9に活動を通した福祉機器・用具への理解度の集計結果を示す。また、図14に理解度ごとの回答率を円グラフで示す。

「1. 深まった」「2. やや深まった」と回答した学生は、計48名（98.0%）で、理解度が非常に高かったことがわかる。

表9 福祉考房の活動を通した福祉機器・用具への理解度

理解度	回答者数(人)
1. 深まった	32
2. やや深まった	16
3. あまり深まらなかった	1
4. 深まらなかった	0

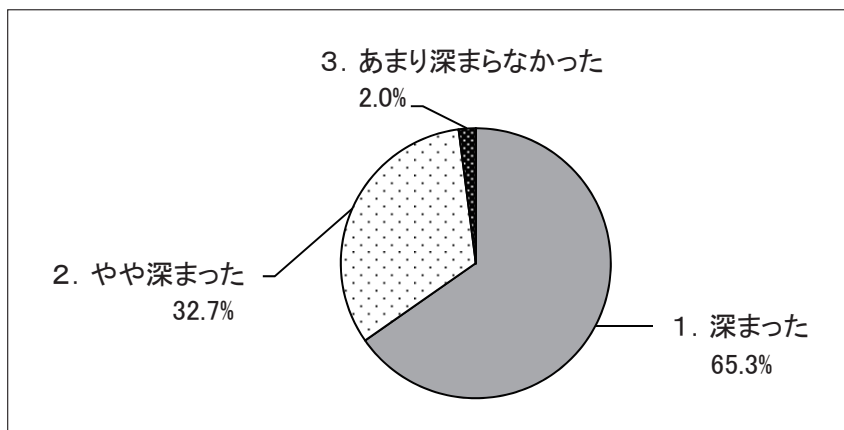


図 14 福祉考房の活動を通した福祉機器・用具への理解度

(4) 質問 3 の選択肢を選んだ理由を教えてください。（自由記述）

「1. 深まった」と回答した人の記述

- ・車いす整備や自助具セミナーで具体的な方法を知ったから（3）
- ・自分たちで自助具を作って理解が深まった（3）
- ・車いす整備で技術を学べたから（3）
- ・やりたいことが増えたから（2）
- ・昨年に比べ、より専門的な視野が増えた
- ・学外活動や国際福祉機器展などへ赴くことで、知識関心が深まった
- ・活動内容を聞いて、福祉用具の必要性がわかった気がする
- ・車いす乗ったりして、体験できたからわかりやすかった
- ・就職のとき、福祉用具と介護の仕事と悩んでたけど、福祉用具の方に興味が持てた
- ・福祉用具販売やレンタルの会社に就職した人の話も聞いて、満足です
- ・もともと福祉用具について知識を深めたいということでゼミを選んだので、ちゃんと学べてきていると思います
- ・ものづくりできたから

「2. やや深まった」と回答した人の記述

- ・車いす保守整備講習会は実践的でためになりました。修了証も嬉しいです。
- ・車いす保守整備の体験から車いすの仕組みの部分がわかり勉強になりました
- ・車いす保守整備講習会を学校で行ってくれたから
- ・生活福祉工学の授業と福祉考房で、福祉用具について知識がたくさんついた
- ・道具に興味あるから、福祉用具にも興味が持てそう

- ・知らなかった福祉用具の知識が増えた
- ・まだ継続した活動ははじめられないけど、福祉用具をもっと知りたいので時間ができたら参加します
- ・授業では前期で少し自助具のことや車いすのことを勉強し、少し学んだので
- ・自助具のことや、車いすの種類、メンテナンスについて知った
- ・まだ理解できていないところも多いから

「3. あまり深まらなかった」と回答した人の記述

- ・友達についてきただけ

「4. 深まらなかった」と回答した人の記述

※回答者なし

「1. 深まった」「2. やや深まった」と回答した人の記述から、自助具を作成したり、車いすを整備したりする実践が理解の助けになっていることがわかる。また、福祉用具に関連する現場の話を直接聞いたことも将来の自分を想像するときに役立ち、具体的な目標を持てている学生もいた。これをきっかけに、さらに福祉用具について興味をもったことがわかる。

(5) 福祉考房の活動を通して、福祉用具以外の福祉分野についての興味は増えましたか？ (該当する1つに○)

この質問に対する回答を表10に示す。また、図15に興味度ごとの回答率を円グラフで示す。

「1. 増えた」「2. やや増えた」と回答した学生は45名(91.8%)であり、福祉用具を中心に学んだり実践したことが福祉への幅広い興味へとつながっていることがわかる。

表10 福祉考房の活動を通した、福祉の様々な分野への興味

福祉の様々な分野への興味	回答者数
1. 増えた	26
2. やや増えた	19
3. あまり増えなかった	3
4. 増えなかった	1

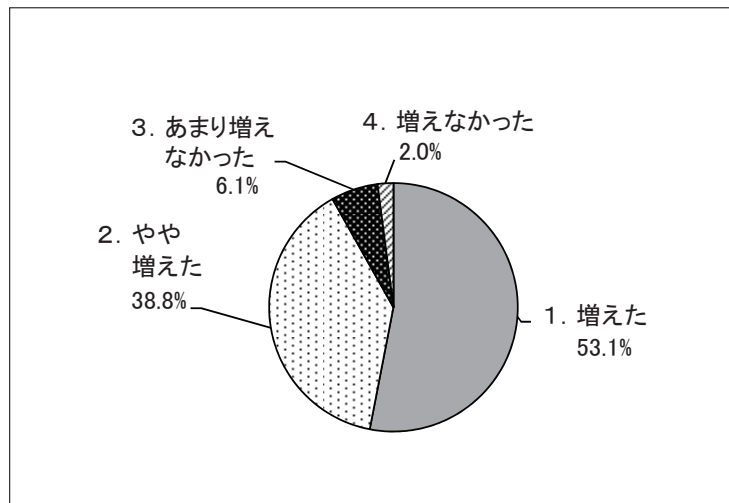


図 15 福祉用具以外の福祉分野への興味

(6) 質問 5 の選択肢を選んだ理由を教えてください。（自由記述）

「1. 増えた」と回答した人の記述

- ・もともと興味はあったけど、福祉用具と他の関わりもわかった（3）
- ・自助具の作成もPC教育もつながりだと思ったこと
- ・ユニバーサルスポーツに興味を持ったから
- ・パソコン倶楽部で知識を学び、情報を提供したいから
- ・今回、小中学生向けの自助具作成体験セミナーを行い、地域交流の大切さと子ども達に福祉を身近なものに感じてもらい、嬉しかった
- ・福祉用具だけでは支援できないので、支援技術や制度などについても知りたいと思った
- ・（社会福祉）実習も終えて、福祉用具の大切さもわかったし、もっといろいろな分野について知りたいと思った
- ・身体障害などの福祉用具を使用する人への関心が増えたと思います

「2. やや増えた」と回答した人の記述

- ・まだあまりわからないけど、他に何があるのか気になった（3）
- ・福祉用具の分野にさらに興味を持った（2）
- ・福祉から見た人に優しい町とは何かを考えるようになった
- ・福祉用具ばかりではなく、他の分野にも興味を持ってました
- ・車いすの種類（スポーツ用）とか興味あった

「3. あまり増えなかった」と回答した人の記述

- ・もともと興味があったから（2）
- ・あまり他のことに目を向けていなかったから

「4. 増えなかった」と回答した人の記述

- ・自分がそういうことにあまり興味がなかったから

「1. 増えた」「2. やや増えた」と回答した人の記述を見ると、分野ごとの関連性、地域との交流など“つながり”について触れているものが多かった。援助者として、他分野との連携や地域での支えあいなど必要なことに気づき、興味を持ったことは実践学習の効果があったといえる。また、さまざまな車いすの種類を知る中で障がい者スポーツやユニバーサルスポーツに興味を持ち、福祉考房の活動内容を広げるきっかけとなる例もあった。

一方、「3. あまり増えなかった」と回答した学生（3名、0.6%）は、もともと興味があったからと回答しているが、日頃から意識の高い学生で自ら学習しているものとする。

(7) 福祉考房の活動で良かった点は何ですか？（自由記述）

- ・実際に車いすの保守整備ができること（4）
- ・あまり上下関係がなく、学生間の交流を深められた（4）
- ・自由に参加できる場所（3）
- ・マインドマップを使ったので自分の考えをまとめられた（3）
- ・道具がそろっていること（2）
- ・空き時間に活動できる
- ・いろいろな種類の車いすがあって良かった。自分で自助具を作成することができる道具がある程度ある
- ・車いすの技術とパソコンの知識を学べた
- ・福祉に対する視野が広がった
- ・地域交流が図れる
- ・開放的すぎないところ
- ・車いす保守整備が地域のために役立っているということがわかった
- ・先輩たちが和気あいあいで楽しい
- ・道具を貸してくれる
- ・優しく相談にのってくれる

- ・気軽に入れるし、追い出されない
- ・居心地良かった
- ・福祉用具の資料や本物があるから、わかりやすい
- ・就職相談にのってくれたこと
- ・広いし作業もしやすかったですし、道具もそろっていたので良かったです

この記述を見ると、車いす整備や自助具作成、PC 倶楽部での活動で、実践したことや知識を得たことで満足していることがわかる。また、「居心地がいい」「空き時間に活動できる」など、学生の余暇活動や居場所としても機能していることがわかる。これは、教員や先輩が常駐していることで活動内容や就職について気軽に相談できたり、同じ活動をしている仲間のいる場所であるためと考える。

施設・設備面では広くて作業しやすく、道具もそろっているという意見も見られる。2008 年度の改善要望で「工房の広さへの不満」「道具の不足」などがあげられていたため、2009 年度は車いす収納棚を設けて作業スペースを確保したり、丸鋸やジグソーなどの木工道具、グラインダや各種やすりなどの金属加工用の道具を充実させた効果もあったと考える。

(8) 福祉考房の活動で改善して欲しい点は何ですか？（自由記述）

- ・人数が足りないのもっと増やしたい（3）
- ・地域の人や他大学との交流を増やしたい（3）
- ・学内での知名度を高めて、福祉考房の考えを広めたい（2）
- ・最初の頃、何をやってらよいかわからなかったから、何か課題が欲しかった
- ・予算がもっとほしい（車いすが買えない）
- ・もっと道具や資料を増やしてほしい
- ・もっと入りやすくしてほしい

2008 年度のアンケートであがった改善点は、「①活動グループの組織化」「②マニュアルの作成」「③車いす整備技術認定制度」の3点である。これらの点は2009年度の活動計画で配慮し、実施してきた。そのため、2009年度の改善点については、「活動者の更なる増加」と「学外との交流」など活動範囲の拡大につながるものが目立った。

(9) 今後、福祉考房でおこないたい活動はありますか？

- ・もう少し活動者間の親睦を深めたい（3）
- ・ユニバーサルスポーツ、障害者スポーツ
- ・スポーツ用の車いすに乗ってみたい

- ・車いす整備をもっとやりたい
- ・もっと自助具を作ってみたい
- ・パンク修理講座
- ・大きなものを作りたい
- ・他大学との連携を増やしたい
- ・他で活動している市民グループなどと情報交換したい

(10) 福祉考房の活動を友人や後輩に勧めたいですか？

この質問の回答を表 11 に示す。「1. 勧めたい」「2. やや勧めたい」との回答者は 48 名（98.0%）で、前述した活動の満足度、居場所としての機能などが評価されているものとする。

表 11 福祉考房の活動を友人や後輩に勧めたいか

友人や後輩に勧めたいか	回答者数
1. 勧めたい	30
2. やや勧めたい	18
3. あまり勧めたくない	1
4. 勧めたくない	0

(11) 質問 10 で③または④と回答した人はその理由を教えてください。

- ・活動する人が増えすぎても困る

「3. あまり勧めたくない」と回答した理由であるが、限られた作業スペースや道具での活動のしにくさや現在の居心地の良さが変化してしまうのではないかと不安から回答したものとする。

V. 今後の課題

前述のアンケートを実施するとともに、学内サークルとして福祉考房で活動している FKC メンバー 13 名のうち、特に参加率の高い 7 名で「現状」、「今後」、福祉考房の「イメージ」について意見交換を行った。意見交換はブレインストーミング形式で行い、図 16 のようなマインドマップで情報を整理した。

このマインドマップを見ると、「イメージ」ツリーからは、さまざまな活動内容を通して、制度や工具の使い方、福祉用具や生活上の知識が増えるなど、授業以外での学習効果も得られたことがわかる。学外活動で地域住民との交流や福祉用具に直接触れる機会

をもつことで、福祉をリアルに感じられている。また、同じ目的・目標を持った仲間がいることで、上下の関係をあまり気にせず楽しく活動できる「居場所」としての意味も大きいことがわかった。

「現在」ツリーは、学内外での活動内容が把握しやすく整理されている。

「今後」ツリーからは、“交流”“活動”“発展”の分岐が見られる。発展させるためには、メンバー間、他大学や地域、施設等との交流が望まれており、その結果、車いす整備ボランティアの拡充や作成した自助具を試してもらい、福祉用具のニーズを知るなどの新規活動も生まれる予定である。また、自らの知識や技術力の向上などの意見もあがった。

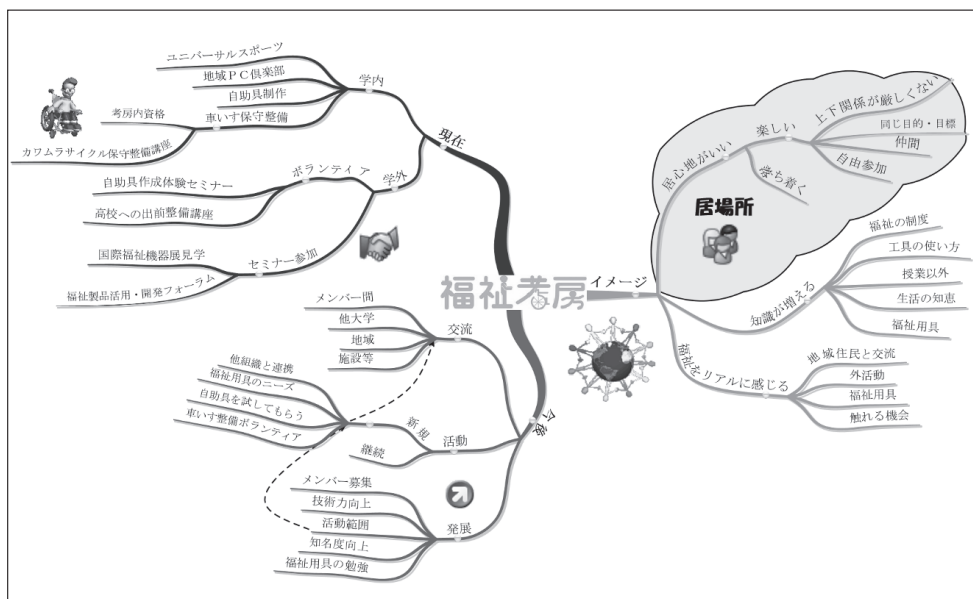


図 16 福祉考房に関するマインドマップ (iMindMap 使用)

前述したアンケートと図 16 のマインドマップをまとめた結果から、現在行っている活動を学外へと展開することを今後の課題とする。また、大学公認サークル「F K C」を活動の推進役として、以下に示す地域との連携策を検討する。

1. 車いす保守整備

車いす整備技術資格を認定された学生を中心に、大学近隣の福祉施設や高等学校、社会福祉協議会などで管理されている車いすの整備ボランティアとして活動する。また、他のボランティア団体などと交流を深め、技術の向上や情報交換などを行う。

2. 自助具作成

自助具を必要とする人のニーズをもとに、作成した自助具を評価していただくようなシステムの構築を検討する。また、他で活動する自助具作成グループや川崎市内の製造業者との連携についても検討する。

3. DCU地域PC倶楽部

現在PC倶楽部で活動するメンバーが、在宅でPCを活用してオンラインコミュニティに参加するサイバーサロンの運営を検討する。サロンには、SNSや電子掲示板などの活用が考えられる。

VI. おわりに

福祉用具の利用中に重大事故が起こっていることが報告されている。安全に使用するためには製造業者、販売・貸与事業者、福祉専門職、利用者のそれぞれで注意する必要がある。特に福祉専門職は福祉用具の中間ユーザーとして、自らが安全に使用方法を習得するとともに、利用者への安全利用の教育を担う必要がある。また、福祉用具の安全な利活用を求めて、関係団体が安全基準の策定や資格の検討も始めている。

福祉考房ではこれらの動向に対応すべく、ボランティアとしての車いす整備技術認定資格の検討や自助具作成体験セミナーでの福祉教育に関わるなど、さまざまな活動を試行してきた。これらの活動は社会福祉士養成課程で学ぶ学生の経験になり、社会に出た際に活かされるであろう。

現在、本学では1年次からの選択科目として「生活福祉工学Ⅰ」を開講しており、福祉用具の種類や関連する制度、福祉用具導入時の留意点やメリット・デメリットなどを講義している。来年度からは2年次以降の選択科目「生活福祉工学Ⅱ」を開講する予定である。「生活福祉工学Ⅱ」は演習形式の選択科目で、福祉用具を実際に利用したり、車いす整備や自助具作成なども学べる内容としている。そのため、福祉考房に直接参加しない学生も現在活動している学生と同様の経験や技術を習得できるものとする。

福祉考房は、社会福祉士養成課程における実践学習として、福祉用具や地域交流を軸に活動しているが、この方法で得た知識や技術が福祉専門職としての責任や福祉サービス利用者の安全な暮らしをサポートしていければ幸いである。

〈引用文献・参考文献〉

- 1) 福祉考房、<http://users.dcu.ac.jp/~koubou/>、(筆者管理 Web サイト)
- 2) 経済産業省、<http://www.meti.go.jp/>、2009 年 10 月 3 日閲覧
- 3) 製品事故の検索、消費者庁、http://www.meti.go.jp/product_safety/kensaku/index.html、2009 年 10 月 25 日閲覧
- 4) 日本福祉用具・生活支援用具協会 (JASPA)、<http://www.jaspa.gr.jp/>、2009 年 10 月 28 日閲覧
- 5) 福祉用具の規格と安全、山内繁、地域ケアリング Vol.11 No.5,2009、北隆館、24～30 ページ
- 6) 福祉用具のライフサイクルにおけるリスクマネジメントに関する調査、日本福祉用具・生活支援用具協会、2008 年 3 月

- 7) 福祉用具とJISマーク表示、鈴木寿郎、地域ケアリング Vol.11 No.11,2009、8～13 ページ
- 8) 福祉用具供給システムからみた社会福祉系人材活用について、黒田大治郎、神戸学院総合リハビリテーション研究第1巻第1号、2006年3月
- 9) 田園調布学園大学「福祉考房」の取り組み～社会福祉士養成課程における実践学習の試み～、川名正昭、田園調布学園大学紀要第3号、2009年3月
- 10) Tony Buzan, Barry Buzan, "The Mind Map Book", BBC Books,1993
- 11) Buzan's iMindmap Ver.3 for Windows, ALMACREATIONS
- 12) Easy Step, <http://www.easystep.jp/>

